

木の子説法

泉鏡花

青空文庫

「——はも鱧あみだぶつ仏、はも仏と唱うれば、ふな鮒らしく世界に生れ、こち鯛へしょうと請ぜられ……仏と雑魚ざこして居べし。されば……干鯛ひだい貝らしい、真経には、たこ蛸とくあのか鱈たら——」

……時節柄わきまを弁えるがいい。蕎麦そばは二銭さがつても、このせち辛さは、明日の糧を思つて、真面目まじめにお念仏でも唱えるなら格別、だじゃれ「蛸とくあのか鱈。」などと愚にもつかない駄洒落もてあそを弄ぶ、と、
 ことが出そうであるが、本篇に必要で、酔にするように切離せないのだから、しばらく御海容を願いたい。

「……干鯛ふりぼさつかいらいし……ええと、蛸とくあのか鱈、三百三もん
 に買うて、ふりぼさつ鯛菩薩に参らする——ですか。とぼけていて、ちよ

つと愛あいきよう嬌きようのあるものです。ほんの一番だけ、あつきあい下さ
いませんか。」

こう、つれに誘われて、それから話である。「蝟とくあのく
たら。」しかし、これだけに対しても、三百三もんがほどの価値ねうち
をお認めになつて、口惜くやしい事はあるまいと思う。

つれは、毛利一いちじゆ樹、という画工えかきさんで、多分、挿画家協そうがか会

員の中に、芳名つらなが列つらなつていようと思う。私は、当日、小しょう作さくの

挿画さしえのために、場所の実写あつちを詠あつちえるのに同行して、麻布我善坊あざぶがぜんぼう

から、狸穴まみあな辺——化けるのかと、すぐまたおなまから苦情くじやうが

出いである。が、憚はげりながらそうではない。我ながらちよつと
しおらしいほどに思う。かつて少年の頃、師家の玄関番げんかんばんをしてい

た折から、美しいその令夫人のおともをして、某子爵家の、前記
 のあたりの別荘に、栗を拾いに来た。拾う栗だから申すまでもな
 く毬いのままが多い。別荘番の貸してくれた鎌で、山がかりに出
 来た庭裏の、まあ、谷間で。御存じでもあろうが、あれは爪先つまさき
 で刺とげ々を軽く圧おさえて、柄えを手許てもとへ引いて搔かく。……不器用でも、
 これは書生の方がうまかった。令夫人は、駒下駄こまげたで圧おさえても転げ
 るから、褌つまをすんなりと、白い足袋はだし、それでも、がさがさ
 と針ゆすを揺り、齒むを剥はいて匆はねるから、憎らしい……と足袋もとつ
 て、雪を鍊ねりものにしたような素足で、裳もすそをしなやかに、毬栗い
 を挟いんでも、ただすんなりとして、露に褌つまもこぼれなかった。――
 ―この趣おもむきを写すのに、画工えかきさんに同行を願ったのである。これだ

と、どうも、そのまま浮世絵に任せたがよさそうに思われない事もない。が、そうすると、さもしいようだが、作者の方が飯にならぬ。そつとして置く。

もつとも三十年も以前の思出である。もとより別荘などは影もなくなつた。が、狸穴、我善坊の辺だけに、引潮のあとの海松みるに似て、樹林は土地の隅々に残っている。餅屋が構図を飲込んで、スケッチブックを懐に納めたから、ざつと用済みの処、そちこち日暮だ。……大和田は程遠し、ちと驕りおごになる……見得を云うまい、これがいい、これがいい。長坂の更科さらしなで。我が一樹も可なり飲ける、二人で四五本傾けた。

時は盃蘭盆うらぼんにかかつて、下町では草市が立っていよう。ものの

あわれどころより、雲を搔裂きたいほど蒸暑かったが、何年にも通つた事のない、十番でも切ろうかと、曾我ではなけれど気が合つて歩ある行き出した。坂を下りて、一度ぐつと低くなる窪くぼち地で、途中街燈の光が途絶えて、鯨が寝たような黒い道があつた。鳥居坂の崖がけした下から、日ひヶ窪の辺らしい。一ひと所、板塀の曲角に、白い蝙蝠こうもりが拈ひろがつたように、比羅びらが一枚貼はつてあつた。一樹が立留まつて、繁かつた櫨かしの陰に、表町の淡い燈ひにすかしながら、その「——干鯛かいらいし——……蛸とくあのくたら——」を言つたのである。

「魚うおせつ説法ほう、というのです——狂言があるんですね。時間もよし、この横へ入つた処らしゆうございますから。」

すぐ角を曲るように、樹の枝も指せば、おぼろげな番組の末に箭やの標示がしてあつた。古典な能の狂言も、社会に、尖せんたん端やしりの簇を飛ばすらしい。けれども、五十歩にたりぬ向うの辻の柳も射ない。のみならず、矢竹の墨が、ほたほたと太く、蓑みのの毛を羽にはいだよな形を見ると、古俳諧にいわゆる——狸おどを威おどす篠しのはり張はりの弓である。

これもまた……面白い。

「おともしましょう、望む処です。」

気競きおつて言うまで、私はいいい心持に酔っていた。

「通りがかりのものです。……臨時に見物をしたいと存じますの

ですが。」

「望む所でございます。」

と、式台正面を横に、卓^{テエブル}子を控えた、受附世話方の四十年配の男の、紋附の帷^{かたびら}子で、舞^{まい}袴^{ばかま}を穿^はいたのが、さも歓迎の意を表するらしく気^き競^おつて言つた。これは私たちのように、酒^{さけ}氣^けがあつたのでは決してない。

切符は五十銭である。第一、順と見えて、六十を越えたらう、白^{しら}髪^がのお媪^{ばあ}さんが下^げ足^たを預^よるのに、二人分に、洋^{ステツキ}杖^{じょう}と蝙蝠^{フクロウ}傘^{かさ}を添^そえて、これが無料で、蝦^{がまぐち}蟄^{ひね}口^{くち}を捻^{ひね}つた一樹の心づけに、手も触れない。

この世話方の、おん袴に対しても、——（たかが半円だ、ご免

を被つて大きく出しておけ。——輕少過ぎる。卓テエブル子を並べて、

謡本少々と、扇子が並べてあつたから、ほんの松の葉の寸志と見え、一樹が宝生雲の空色なのを譲りうけて、その一本を私に渡し、

「いかが。」

「これも望む処です。」

つい私は莞爾にっこりした。扇子店おうぎみせの真上の鴨居かもいに、当夜の番組が

大字だいじで出ている。私が一わたり読み取つたのは、唯ただいま今の扉下で

はない、ここでの事である。合せて五番。中に能の仕舞もまじつて、序からざつと覚えてはいるが——狸の口上らしくなるから一々は記すまい。必要なだけを言おう。

必要なのは——魚説法——に続く三番目に、一ひとつつきのこの茸ひとつきのこ、（くさび

ら。——鷺さぎ、玄庵——の曲である。

道の事はよくは知らない。しかし鷺の姿は、近ごろ狂言ながれの流ながれに影は映らぬと聞いている。古い隠居か。むかしものの物ものずき好で、稽古けいこを積んだ巧者が居て、その人たちが、言わば素人の催しであるうも知れない。狸穴近所には相応ふさわしい。が、私のいうのは流儀の事ではない。曲である。

この、茸——

あわただ 慌しいまでに、一樹が狂言を見ようとしたのも、他ほかのどの番組ばんぐみでもなく、ただこれあるがためであろう、と思う仔細しさいがある。あたかも一樹が、扇子のせめを切りながら、片手の指のさきで軽く乳のあたりと思う胸をさすつて、返す指で、左の目をおさ圧えたのを

見るにつけても。……

一樹を知ったほどのもので、画工えかきさんの、この癖を認めないものはなからう。ちよいと内証で、人に知らせないように遣やる、この早業はやわざは、しかしながら、礼拝と、愛撫と、謙讓と、しかも自恃こりをかね、色を沈静にし、目を清澄にして、胸に、一種深き人格を秘したる、珠玉を俛しのばせる表ひょうげん 顕であつた。

こういううちにも、舞台——舞台は二階らしい。——一間四面の堂の施主が、売僧まいすの魚説法を憤つて、

「——おのれ何としようぞ——」

「——打たば打たしめ、棒鱈ぼうだらか太刀魚たちうおでおうちあれ——」

「——おのれ、また打擲ちようちやくをせいでおこうか——」

「——ああ、いかな、かながしらも堪^{たま}るものではない——」

「——ええ、苦々しいやつかな——」

「——いり海老^{えび}のような顔をして、赤目張^{あかめば}るの——」

「——さてさて憎いやつの——」

相当の役者と見える。声が玄関までよく通つて、その間に見物の笑^{わらい}声^{こえ}が、どツと響いた。

「さあ、こちらへどうぞ、」

^{はばか}「憚り様。」

^{はしご}階子段は広い。——先へ立つ世話方の、あとに続く一樹、と

並んで、私の上りかかる処を、あがり口で世話方が片膝をついて、留まって、「ほんの仮舞台、諸事不行届きでありまして。」

挨拶あいさつするののに、段を覗のぞ込んだこ。その頭と、下から出かかつた頭が二つ……妙に並んだ形が、早や横正面に舞台の松と、橋がかりの一二三の松が、人波をすかして、揺れるように近々と見えるので……ややその松の中へ、次の番組の茸が土を擡もたげたようで、余程おかしい。……いや、高砂たかさごの浦の想われるのに対しては、むしろ、むくむくとした松露であろう。

その景色の上を、追込まれの坊主が、鱗ひれのごとく、キチキチところも そで あお法衣の袖を煽あおつて、

「——こちやただ飛魚とびうおといたそう——」

「——まだそのつれを言うか——」

「——飛魚しよう、飛魚しよう——」

と揚幕へ宙を飛んだ——さらりと落す、幕の隙すきに、古畳と破やれし障子ようじが顛あられて、消えた。……思え、講釈だと、水戸黄門が竜神しろうがしらの白頭しろがしら、床几しょうぎにかかり、奸賊かんぞく紋太夫を抜打に切つて棄てる場所に……伏屋ふせやの建具の見えたのは、どうやら寂さびた貸席か、出来合の倶楽部などを仮に使つた興行らしい。

見た処、大広間、六七十畳、舞台を二十畳ばかりとして、見物は一杯とまではない、が賑にぎやかであつた。

この暑さに、五つ紋の羽織も脱がない、行儀の正しいのもあれば、浴衣で腕まくりをしたのも居る。——裾すそ模様もようの貴婦人、ドレスの令嬢も見えたが、近所居まわりの長屋連らしいのも少くない。印半纏しるしばんてんさえも入れごみで、席しきりに劃しきりはなかつたのである。

で、階子はしごの欄干際を縫って、案内した世話方が、

「あすこが透いております。……どうぞ。」

と云つた。脇正面、橋がかりの松の前に、肩膝を透いて、毛もうせ氈んの緋ひが流れる。色紙、短冊でも並びそうな、おさらいや場末の寄席よせ気分とは、さすが品の違しなつた座をすすめてくれたが、裾模様、背広連が、多くその席を占めて、切髪の後室も二人ばかり、白襟で控えて、金泥きんでい、銀地の舞扇まで開いている。

われら式、……いや、もうここで結構と、すぐその欄干くつつに附くいた板敷へ席を取ると、更紗さらさの座蒲団ざぶとんを、兩人に当てがって、「涼すずしい事はこの辺が一等でして。」

と世話方は階子を下りた。が、ひどく蒸暑い。

「御免を被つて。」

「さあ、脱ぎましょう。」

と、こくめいに畳んで持った、手拭てぬぐいで汗を拭いた一樹が、羽織を脱いで引くるめた。……羽織は、まだしも、世の中一般に、頭に被るものと極きまった麦藁むぎわらの、安値なのではあるが夏帽子を、居いかわり立直る客が蹴散けちらし、踏ふみ挫ひしぎそうにする……

また幕間で、人の起居たちいは忙しくなるし、あいにく通筋とおりすじの板敷に席を取ったのだから堪たまらない。膝の上へのせれば、跨またぐ。敷居に置けば、蹴る、脇へずらせば踏もうとする。

「ちよッ。」

一樹の囁ささやく処によれば、こうした能狂言の客の不作法さは、場

所にはよろうが、芝居にも、映画場にも、場末の寄席にも比較しようがないほどで。男も女も、立てば、座すわつたものを下人げにんと心得る、すなわち頤あごの下に人間はない気なのだそうである。

中にも、こども服のノーティ少女、モダン仕立ノーティ少年の、
 跋扈跳梁ばつこちようりようは夥多おびただしい。……

おなじ少年が、しばらくの間に、一度は膝を跨またぎ、一度は脇腹を小突き、三度目には腰を蹴つけた。目まぐるしく湯呑所ゆのみじよへ通つたのである。

一樹が、あの、指を胸につけ、その指で、左の目をおさえたと思つと、

「毬栗いがぐりは果報ものですよ。」

私を見て 苦にがわらい笑しながら、羽織でくるくると夏帽子を包んで、みしと言わせて、尻にかつて、投膝てのひらに組んで掌をそらした。

「がきに踏まれるよりこの方がさばさばします。」

何としても、これは画工えかきさんのせいではない——桶屋おけや、鑄掛屋

でもしたろうか？……静かに——それどころか！……震災前ぜんには、

十六七で、渠かれは博徒の小僧であつた。

——家、いやその長屋は、妻恋坂つまごいざか下——明神の崖うらの穴

路地で、二階ひとまに一室ふるいえの古屋だったが、物干ばかりが新しく突立つた

つていたという。——

これを聞いて、かねて、知っていたせいであろう。おかしな事

には、いま私たちが寄凭よりかかるばかりにしている、この欄干が、ま

わりにぐるりと板敷を取つて、階はしごだん子壇を長方形の大穴に抜いて、押廻わして、しかも新しく切立っているので、はじめから、たとえば毛利一樹氏、自叙伝中の妻恋坂下の物見に似たように思われてならなかつたのである。

「——これはこのあたりのものでござる——」

藍あいの長なが上がみしも下、黄のしめの熨斗目、小刀をたしなみ、持もち扇おうぎで、舞

台で名のつた——脊の低い、肩の四角な、堅くなつたか、癩かんのせいか、首のやや傾かしいだアドである。

「——それがし某が屋敷に、当年はじめて、何とも知れぬくさびらが生え

た——ひたもの取つて捨つれども、夜よの間には生え生え、幾たび取つてもまたものごとく生ゆる、かような不思議なことはござらぬ——」

鷺玄庵、シテの出る前に、この話の必要上、一樹——本名、幹み次郎きじろうさんの、その妻恋坂の時分の事を言わねばならぬ。はじめ、別して酔つた時は、幾度も画工えかきさんが話したから、私たちはほとんどその言葉通りといつてもいいほど覚えている。が、名を知られ、売れツこになつてからは、氣振けぶりにも出さず、事的一端に触れるのをさえ避けるようになった。苦心談、立志談は、往々にして、その反対の意味の、自己吹ふい聴ちようと、陰性の自讃、卑下高慢

になるのに氣附いたのである。談中——主なるものは、茸きのこで、渠かれが番組の茸を遁にげて、比羅びらの、蝟たこのとあのくたらを説いたので、ほぼ不斷の態度が知れよう。

但し、以下の一ひとくさり齧かは、かつて、一樹、幹次郎が話したのを、ほとんどそのままである。

「——その年の残暑の激しさといつてはありませんでした。内中皆裸はだか体です。六畳に三畳、二階が六畳という浅間ですから、開放して皆見えますが、近所が近所だから、そんな事は平気なものです。——色気も娑婆しやば気も沢山やっらな奴等が、たかが暑いくらいで、そんな状ざまをするではありません。実はまるで衣類がない。——こ

れが寒中だと、とうの昔凍え死んで、こんな口を利くものは、貴方がたの前に消えてしまっていたんでしようね。

男はまだしも、おんな婦もそれです。ご新姐しんぞ——いま時、妙な呼び方で。……主人が医師いしやの出来損いですから、出来損いでも奥さん。

……さしあたってな小博打こぼくちが的あてだったのですから、三二下の潜りさんしたもぐ

でも、姉さん。——話のついでですが、裸の中の大男の尻の黄色

なのが主人で、汚れたもつこふんどし畚もつこふんどし禪しんをしていたのです、禪が畚じや、

姉あねごとは行きません。それにした処で、姉あねさんとでも云うべき処

を、ご新姐——と皆が呼びましたのは。——

万世橋向うの——町の裏店うらだなに、もと洋服のさい取なやを萎なやして、

あざとい碁会所をやっていた——金六、ちやら金という、野幫間のだいこ

のような元はげのちよいちよい顔を出すのが、ご新姐、ご新姐という、
それがつい、口癖になつたんですが。——膝ひざ股ももをかくすものを、
腰つるから釣つるしたように、乳を包んだだけで。……あとはただ真白まっしろ
な……冷い……のです。冷い、と極きめたのは妙ですけれども、飢
えて空腹ひだるくつていゝんだから、夏でも火気はありますまい。死しにぎ
わに熱でも出なければ——しかし、若いから、そんなに瘦やせ細つ
たほどではありません。中肉で、脚こまたのすらりと、小股こまたのしまつた、
瓜うりぎね顔で、鼻筋の通つた、目おおきの大きい、無口で、それで、ものい
いのきつぱりした、少し言葉尻の上る、声に歯けんぎれの嶮けんのある、
しかし、氣の優しい、私より四つ五つ年上で——ただうつくしい
というより仇あだつぽい婦人おんなだつたんです。何しろその体裁ですから、

すなおな髪を引詰めて櫛巻くしまきでいましたが、生際が薄青いくらい、襟脚が透通つて、日南ひなたでは消えそうに、おくれ毛ばかり艶つやつや々として、涙でしよう、濡れている。悲惨な事には、水ばかり飲むものだから、身籠みごもつたようにかえつてふくれて、下腹のゆいめなぞは、乳の下を縊くびつたようでしたよ。

空腹すきはらにこたえがないと、つよく紐ひもをしめますから、男だつて。

……

お雪さん——と言いました。その大切な乳をかくす古手拭は、はだ膚に合つた綺麗好きで、腰のも一所に、ただ洗いただ洗いするんですから、油あぶらでり 早はやの炎熱で、銀粉のようににじむ汗に、ちらちらと紗しやのように靡なびきました。これなら干ばしになったら、すぐ羽

にかわつて欄間を飛ぶだろうと思つたほどです。いいえ、天人なぞと、そんな贅ぜいたく沢たくな。裏長屋ですもの、くさばかげろうの幽霊です。

その手拭が、娘時分に、踊のお温習さらいに配つたのが、古行李ふるこくりの底かなにかに残つていたのでから、あわれですね。

千葉だそうです。千葉の町の大きな料理屋、万翠楼ばんすいろうの姉娘が、今の主人の、その頃医学生だったのと間違つて。……ただ、それだけではないらしい。学生の癖に、悪く、商売人じみた、はなを引く、賭碁かけごを打つ。それじゃ退学にならずにいません。佐原の出で、なまじ故郷が近いだけに、外聞かたがた東京へ遁出にげだした。姉娘があとを追つて遁げて来て——料理屋の方は、もつとも継母だ

と聞きましたが一——帰れ、と云うのを、男が離さない。女も情を立てて帰らないから、両方とも、親から勘当になつたんですね、親類義絶——つまるどころ。

一枚、畚褌の上へ引張ひっぱらせると、脊は高し、幅はあり、風采ふうさい堂々たるものですから、まやかし病院の代診なぞには持つて来いで、あちこち雇われもしたそうですが、脉みやくを引く前に、顔の真まんな中かを見るのだから、身が持てないで、その目下の始末で。……

変に物干ばかり新しい、妻恋坂下へ落ちこぼれたのも、洋服の月賦げつぷ払ばらの滞とどなぞから引ひっかかりの知ち己かづで。——町の、右の、ちやら金のすすめなり、後見なり、ご新姐あだの仇あだな処をおとりにして、碁会所を看板に、骨牌賭博かるたばくちの小宿こやどという、もくろみだったらしい

のですが、碁盤の櫓やぐらをあげる前に、長屋の城は落ちました。どの道落ちる城ですが、その没落をはやめたのは、慾よくにあせつて、怪しい企たくらみをしたからなんです。

質の出入れ——この質では、ご新姐の蹴出し……縮ちりめん緬めんのなぞはもう疾とつくはない、青地のめりんす、と短刀ひとふり一口。数珠一聯れん。千葉を遁げる時からたしなんだ、いざという時のふたしな二品を添えて、何ですか、三題話のようですが、凄すこいでしよう。……事実なんです。貞操しるしの徴しるしと、女の生命とを預けるんだ。——（何とかじゃ築地けえへ帰られねえ。）——何の事だかわかりませんがね、そういつて番頭おとを威かせ、と言いつかつた通り、私が（一樹、幹次郎、自分ぶんをいう。）使つかいに行つたんです。冷汗ひやあせを流して、談判の結果が

三分、科学的に数理で顕せば、七十と五銭ですよ。

お雪さんの身になつたらどうでしょう。じか肌と、自殺を質に入れたんですから。自殺を質に入れたのでは、死ぬよりもつらいでしょう。――

――当時、そういった様子でしてね。質の使、箆でお菜漬の買ものだの、……これは酒よりは香が利きます。――はかり炭、粉米のばら銭買の使いに廻らせる。――わずかの縁に縫つてころげ込んだ苦学の小僧、（再び、一樹、幹次郎自分をいう。）には、よくは、様子は分らなかつたんですが、――ちやら金の方へ、鴨がかかった。――そこで、心得のある、ここの主人をはじめ、いっところがり込んで、なかまが二人、一人は検定試験を十年

来落第の中老の才子で、近頃はただ一攫千金の投機を狙っています。一人は、今は小使を志願しても間に合わない、慢性の政治狂と、三二個を、紳士、旦那、博士に仕立てて、さくら、というものに使って、鴨を剥いで、骨までたたこうという企謀です。前々から、ちやら金が、ちよいちよい来ては、昼間の廻籠のように、二階だの、濡縁だの、薄羽織と、兀頭をちらちらさして、ひそひそと相談をしていましたつけ。

当日は、小僧に一包み衣類を背負わして——損料です。黒紹の五つ紋に、おなじく鉄無地のべんべらもの、くたぶれた帯などですが、足袋まで身なりが出来ました。そうは資本が続かないからと、政治家は、セルの着流しです。そのかわり、この方は山高帽

子で——おやおや忘れた——鉄無地の旦那に被^{かぶ}せる帽子を。……
 そこで、小僧のを脱がせて、烏打帽です。

——覚えていますが、その時、ちやら金が、ご新姐に、手づく
 りのお惣菜、麩^{そまつ}末なもの、と重詰の豆腐^{とうふ}滓、……卵^うの花を煎^いつ
 たのに、織^{せん}の生^{しょう}姜^がで小氣^{せうき}転を利かせ、酢にした鯉^{しこ} 鱒^{いわし}で氣前
 を見せたのを一重。——きらずだ、繫^{つな}ぐ、見^{けん}得^{とく}がいいぞ、吉左^{きちざ}
 右^{そう}！ とか言つて、腹^{はら}が空^すいているんですから、五つ紋も、仙台
 平^{ひら}も、手づかみの、が^くつが^いつ喰^く。……

で、それ以来——事件の起りました、とりわけ暑い日になりま
 すまで、ほとんど誰も腹^{たま}に堪^たまるものは食^たわなかつたのです。——

……つもつても知れましようが、講談本にも、探偵ものにも、映

画にも、名の出ないほどの悪徒なんですから、その、へまき加減。一つ穴のお虻けらどもが、反対に鴨にくわれて、でんぐりかえしを打ったんですね。……夜になって、炎天の鼠ねずみのような、目も口も開かない、どろどろで帰って来た、三人のさくららの半間さを、ちやら金が、いや怒るの怒らないの。……儲けるどころか、対手方あいてかたに大分の借かりが出来た、さあどうする。……で、損料……立たち処どころに損料を引剥ひっばぐ。中にも落第の投機家などは、どぶつで汗ツかき、おまけに脚気かっけを煩わづっていたんだから、このしみばかりでも痛事いたごとですね。その時です、……洗いざらい、お雪さんの、蹴出きりだしと、数珠と、短刀の人身御供ひとみごかうは――

まだその上に、無慙むざんなのは、四歳よっつになる男の児こがあつたんです

が、口癖に——おなかがすいた——おなかがすいた——と唱歌のように唱^{うた}うんです。

（——かなしいなあ——）

お雪さんは、その、きつぱりした響く声で。……どうかすると、雨が降過ぎても、

（——かなしいなあ——）

と云う一つ癖があつたんです。尻上りに、うら悲しい……やむ事を得ません、得ませんけれども、悪い癖です。心得なければ不^い可^けませんね。

幼い時間^{あとしぎ}いて、前後^{つばき}うろ覚えですが、私の故郷の昔話に、

（椿^{つばき}ばけ——ばかり。）農家のひとり子で、生れて口をきくと、

（椿ばけ——ばたり。）と唾おしの一声ではないけれども、いくら叱つても治らない。弓が上手で、のちにお城に、もののけがあつて、国の守かみが可おそろし恐へんげい変化に悩まされた時、自から進んで出て、奥庭の大椿に向つていきなり矢を番つがえた。（椿ばけ——ばたり。）と切つて放すと、枝も葉も萎なえなえ々々となつて、ばたり。で、国のやみが明あかるくなつた——そんな意味だつたと思います。言葉は氣をつけないければ不可いけませんね。

食不足で、ひくひく煩つていた男の児こが七転八倒します。私は方々の医師いしやへ駆附けた。が、一人も来ません。お雪さんが、抱いたり、擦さすつたり、半狂乱でいる処へ、右の、ばりりざんと敗北した落武者が這はい込んで来た始末で……その悲惨さといつたらありま

せん。

食あたりだ。医師いしやのお父さんが、診察をしたばかりで、藪やぶだからどうにも出来ない。あくる朝なくなりしました。きらずに煮込んだ剥身むきみは、小指を食切るほどの勢いきおいで、私も二つ三つおすそわけに預るし、皆も食べたんですから、看板の鯢しこのせいです。幾月ぶりかの、お魚だから、大人は、坊やに譲ったんです。その癖、出がけには、坊や、晩には玉子だぞ。お土産は電車だ、と云つて出たんですのに。――

お雪さんは、歌磨の絵の海女あまのような姿で、鮑あわび――いや小石を、そつと拾つては、鬼門をよけた雨落あまおちの下へ、積み積みしていたんですね。

（——かなしいなあ——）

めそめそ泣くような質たちではないので、石も、日も、少しずつ積りました。

——さあ、その残暑の、朝から、早てりつけます中へ、端書はがきが来ましてね。——落目もこうなると、めったに手紙のぞなんぞ覗いた事のないのに、至急、と朱がきのしてあつたのを覚えています。ご新姐あてに、千葉から荷が着いている。お届けをしようか、受取りにおいで下さるか、という両国辺の運送問屋から来たのでした。品物といえど釘の折でも、屑屋くずやへ売るのに欲ほしい処。……返事を出す端書が買えないんですから、配達をさせるなどは思いもよらず……急いで取りに行く。この使つかいの小僧ですが、二日ばかりとい

うもの、かたまつたものは、漬菜つけなの切れはし、黒豆一粒入っていません。ほんとうのひもじさは、話では言切れない、あなた方の腹がすいたは、都合によつてすかせるのです。いいえ、何も喧嘩をするのじゃありません、おわかりにならないと思ひますから、よめますが。

もつとも、その前日も、金子かね無心の使に、芝の巴ともえちよう町附近あたりまで遣られましてね。出来ツこはありません。勿論、往復とも徒て歩くなんですから、帰途かえりによろよろ目が眩くらんで、ちようど、一つ橋を出ようとした時でした。午砲どん！——あの音で腰を抜いたんです。土ひツかを引搔ひツかいて起上がる始末で、人間もこうなると浅間せんげんしい。……行暮れた旅人が灯をたよるように、山賊さんぞくの棲すでも、いかさま暮会

所でも、氣障きざな奴でも、路地が曲りくねっていても、何となく便たよる氣が出て。——町のちやら金の店を覗くと、出窓の処に、忠臣蔵の雪の夜討の炭部屋の立盤たてばんこ子を飾つて、碁盤が二三台。客は居ません。ちやら金が、碁盤の前で、何だか古い帳面を繰つておりましたつけ。(や、お入り。)金齒で呼込んで、家内が留守で蕎麦そばを取る処だ、といつて、一つ食わしてくれました。もり蕎麦は、滝の荒行ほど、どつしりと身にこたえました。そのかわり、ご新姐——お雪さんに、(おい、ごく内証ないだぜ。)と云つて、手紙を托たくけたんです。堇すみれいろ色の横封筒……いや、どうも、その癖言う事は古い。(いい加減とぎわげんに常盤御前が身のためだ。)とこうです。どの道そんな蕎麦だから、伸び過ぎていて、ひどく中毒あたつて、

まつずみちよう
松住町 辺をうなりながら歩くうちに、どこかへ落してしま
ましたが。

——今度は、どこで倒れるだろう。さあ使いに行く。着るもの
は——

私の田舎の叔母が一枚送ってくれた単衣ひとえを、病人に着せてある
のを剥はぐんです。その臭さというものは。……とにかく妻恋坂下
の穴を出ました。

こんなにしていて、どうなるだろう。櫓やぐらのような物干を見ると、
ああ、いつの間にか、そこにも片隅に、小石が積んであるんです。
何ですか、明神様の森の空が、雲で真暗まっくらなようでした。

鰻屋うなぎやの神田川——今にもその頃にも、まるで知ちかづ己きはありま

せんが、あすこの前を向うへ抜けて、大通りを突切ろうとすると、あの黒い雲が、聖堂の森の方へと馳ると思ふと、頭の上にかぶさつて、上野へ旋風を捲きながら、灰を流すように降つて来ました。ひよろひよろの小僧は、叩きつけられたように、向う側の絵草紙屋の軒前へ駆込んだんです。濡れるのを厭いはしません。吹倒されるのが可恐かつたので、柱へつかまつた。

一軒隣に、焼芋屋がありましたね。またこの路地裏の道具屋が、私の、東京ではじめて草鞋を脱いだ場所で、泊めてもらった。しかもその日、晩飯を食わせられる時、道具屋が、めじの刺身を一ひと疋箸で挟んで、鼻のさきへぶらさげて、東京じゃ、これが一皿、じゃあない、一疋、若干金につく。……お前たちの二日分の祭礼

の小遣いより高い、と云つて聞かせました。——その時以来、腹
 のくちい、という味を知らなかつたのです。しかし、ぼんやり突つ
 立つたつては、よくこの店を覗のぞいたものです。——横なぐりに吹込み
 ますから、古風な店で、半分蒔ひよけをおろしました。暗くなる……薄
 暗い中に、颯さつと風に煽あおられて、媚なまめかしい婦おんなの裙すそが燃えるのかと
 思う、あからさまな、真ま白しろな大きな腹が、蒼あおざめた顔して、宙
さかさまに倒かさにぶら下りました。……御存じかも知れません、芳よし年の月
 百姿の中の、安達あだちヶ原、縦にま絵い二枚い続つぎの孤ひと家つやで、店さきには遠
 慮はをする筈はず、別の絵を上被うわりに伏せ込んで、窓の柱に掛けてあ
 ったのが、暴風あらし雨で帯を引裂いたようにめくれたんですね。ああ、
 吹込かむしぶきに、肩かかも踵かかとも、わなわな震えている。……

雨はかぶりしましたし、裸のご新姐の身の上を思つて……」

（——語つてここを言う時、その胸を撫でて、目を押える、ことをする。）

「まぶたを溢あふれて、鼻柱をつたう大粒の涙が、唇へ甘く濡れました。甘い涙。——いささか気障きざですが、うれしい悲しいを通り越した、辛い涙、渋い涙、鉛の涙、男女の思おも迫いつた、そんな味は覚えがない、ひもじい時の、芋の涙、豆の涙、餡あんぱんの涙、金き鰐んつばの涙。ここで甘い涙と申しますのは。——結膜炎だか、のぼせ目だか、何しろ弱り目に祟たたり目でしょう。左の目が真紅まつかになつて、渋くつて、辛くつて困りました時、お雪さんが、乳を絞つて、つき込んでくれたのです。

（——かなしいなあ——）

走りはしません、ぽたぽたぐらい。一人ひとりっこ兎だから、時々飲んでいたんですが、食が少いから涸かれがちなんです。私を仰あおむ向けにして、横合から胸をはだけで、……まだあわせ裕あ裕わせ、お雪さんの肌には微かすかに紅くれなの氣いのちらついた、春の末でした。目をはすすまいとするから、弱腰ひねを捻ひねつて、鬚まげも鬢びんもひいやりと額ひねにかかり……白い半身みが逆さかになつて見えましょう。……今時……今時……そんな古風な、療治まじないを、禁まじない厭ないを、するものがあるか、とおっしゃいますか。ええ、おっしゃい。そんな事は、まだその頃ありました、精盛藥館せいせいやくかん、一お一い二ちを、掛売かで談だんずるだけの、余裕あ裕わがあつていう事です。

このありさまは、ちよつと物議ぶつぎになりました。主人あるじの留守くすで。

二階から覗いた投機家が、容易ならぬ沙汰をしたんですが、若い燕だか、小僧の蜂だか、そんな詮議せんぎは、飯を食ったあとにしよう
と、徹底した空腹です。

それ以来、涙が甘い。いまそのこぼれるにつけても、さかさに釣られた孤家ひとつやの女の乳首が目に入つて来そうで、従つて、ご新姐の身の上に、いつか、おなじ事でもありそうでならなかった。

——予感というものはあるものでしょうか。

その日の中に、果しておなじような事が起つたんです。——それは受取つた荷物……荷は籠かごで、茸きのこです。初茸はつたけです。そのため
に事が起つたんです。

通り雨ですから、すぐに、赫かつと、まぶしいほどに日が照ります。

甘い涙の飴あめを嘗なめた勢いきおいで、あれから秋葉ヶ原をよろよると、佐久間町の河岸かし通り、みくら橋、左衛門橋。——とあの辺から両側には仕済しすました店の深い問屋が続きますね。その中に——今思うと船宿でしょう。天井に網を揃えて掛けてあるのが見えました。故郷の市場の雑貨店で、これを扱うものがあつて、私の祖父じじい——地方いなかの狂言師が食うにこまつて、手内職にすいた出来上りのこの網を、使つかいで持つて行つたのを思い出して——もう国に帰ろうか——また涙が出る。とその涙が甘いのです。餅か、団子か、お雪さんが待つていよう。

（一銭五厘です。端書代が立替えになつておりますが。）
（つい、あの、持つて来ません。）

(些ささい細な事ですが、店のきまりはきまりですからな。)

年の少わかい手代は、そつぼうを向く。小僧は、げらげらと笑つて
いる。

(貸して下さい。)

(お貸し申さないとは申しませんが。)

(このしるしを置いて行きます。貸して下さい。)

私は汗じみた手拭を、懐ふところ中から——空腹すきはらをしめていたかどう

かはお察し下さい——懐中から出すと、手代が一代の逸話として、
よい経験を得たように、しかし、汚きたならしそうに、撮つまんで拈ひろげまし
た。

(よう!)と反そりかえった掛声をして、

(みどり屋、ゆき。——荷は千葉と。——ああ、万翠楼だ。……
 医師いしやと遁にげた、この別嬪べっぴんさんの使ですかい、きみは。……ぼく
 は店用で行って知ってるよ。……果報ものだね、きみは。……可
 愛がってくれるだろう。雪白肌の透綾すきあやむすめ娘は、ちよつと浮気も
 のだというぜ。)

と言やあがった……

その透綾娘は、手拭の肌襦袢はだじゆばんから透通った、肩を落して、裏
 の三畳、濡縁の柱によっかかったのが、その姿ですから、くくり
 つけられでもしたように見えて、ぬの一重の膝の上に、小児こどもの絵
 入雑誌を拵げた、あの赤い絵の具が、腹から血ではないかと、ぞ
 つとしたほど、さし俯向うつむいて、顔を両手でおさえていました。――

— やつと小僧が帰った時です。 —

(来たか、荷物は。)

と二階から、力のない、鼻の詰つまった大おおきな声。

(初茸ですわ。)

と、きつぱりと、投上げるように、ご新姐が返事をする、

(あああ、銭ぜににはならずか——食おう。)

と、また途方もない声をして、階はしご子段一杯くだんに、大おおきな男おきなが、禪ぜんを真ま正しょう面めんにあら頭まっしられる。続いて、足早きざに刻きざんで下りたのは、政

治狂さるまたの黒い猿さる股またです。ぎしぎしと音がして、青黄色に膨れた、

投機家ずが、豚を一匹、まるで吸ひった蛭ひるのように、ずどうんと腰で摺ずり、欄干へこに、よれよれの兵児帯おびをしめつけたのを力綱すかにすか縋すかって、

ぶら下がるように楯かじを取って下りて来る。脚気かっけがむくみ上つて、もう歩けない。

こども小児のつかつた、おかわを二階に上げてあるんで、そのわきにすいか西瓜の皮が転がって、あおばえ蒼蠅が集つてたかいるのを視た時ほど、なさけ情ない思いをした事は余りありません。その二階で、三人、何をしているかというと、はなをひくか、あの、泥石の紙の盤で、碁を打つていたんですがね。

欠けた瀬戸火鉢は一つある。けれども、煮ようたつてしょうゆ醤油なんか思いもよらない。焼くのに、炭の粉こもないんです。政治狂が便所わきの雨樋あまどいの朽ちた奴を……一雨ぐらいじゃ直ぐ乾く……握り壊して来る間に、お雪さんは、茸に敷いた山草を、あの小石

の前へ挿しましたつけ。古新聞で火をつけて、金網をかけました。処で、火気は当るまいが、溢出はみでようが、皆引ひっつか掴んで頬張る気だから、二十ばかり初はつたけ茸を一所に載せた。残らず、薄樺色うすかばいろの笠を逆さかさに、白い軸を立てて、真中まんなかごろのが、じいじい音を立てると、……青い錆さびが茸の声のように浮いて動く。

(塩はどうした。)

(ごごんせん。)

(魚断うおだち、菜断さいだち、穀断こくだちと、茶断ちやだち、塩断しおだち……こうなりや鯨しやちよこだ立たちだ。)

と、主人あるじが、どたりと寝て、両脚を大の字に開くと、

(あああ、待ちたまえ、逆さかさになった方が、いくらか空腹ひだるさが凌しのげ

るかも知れんぞ。経験じや。）

と政治狂が、柱へ、うんと搦からんで、尻を立てた。

（ぼくは、はや、この方が楽で、もう遣つとるが。）

と、水浸しの丸太のような、脚気の足を、襖ふすまの破れ棧やに、ぶくぶくと掛けている。

（幹もやれよ。）

と主人あるじが、尻しやくとりむしで、尺蠖しやくとりむし虫むしをして、足をまた突張つつばつて、

（成程、気がかわつていい、茸は焼ける、こつちはやけだ。）

その挙げた足を、どしんと、お雪さんの肩に乗せて、柔かな細ほ頸そくびをしめた時です。

（ああ、ひもじいを逆さかさにすれば、おなかが、くちいんだわね。）

と真俯まうつむ向けに、頬を畳に、足が、空で一つに、ひたりとついて、白鳥が目を眠ったようです。

ハツと思うと、私も、つい、脚を天井に向けました。——その目の前で、

(男は意気地がない、ぐるぐる廻らなくっちゃあ。)

名工のひき刀が線を青く刻んだ、小さな雪の菩薩ぼさつが一体、くるくると二度、三度、六地藏のように廻る……濃い睫毛まつげがチチと瞬いて、耳みみたぶ朶と、咽喉のどに、薄紅梅の血が潮さした。

(初茸と一所に焼けてしまえばいい。)

脚気あえは喘いで、白い舌を舐なめずり、政治狂は、目が黄色に光り、主人あるじはけらけらと笑った。皆逆立ちです。そして、お雪さんの言

葉に激はげまされたように、ぐたぐたと肩腰をゆすつて、逆さかさまに、のたうちました。

ひとりでに、頭のとつぺんへ流れる涙なみだの中に、網の初茸うちが、同じように、むくむくと、笠軸を動かすと、私はその下に、燃える火を思った。

皆、咄嗟とつさの間、ですが、その、廻まわっている乳が、ふわふわと浮いて、滑らかに白く、一列に並んだように思う……

（心配しないでね。）

と莞爾にっこりしていった、お雪さんの言ことばが、逆さかさまだから、（お遁にげ、危あぶない。）と、いうように聞きえて、その白い菩薩ぼさつの列けいの、一番かまち框かまちへ近いのに——導ずかれるように、自分の頭と足が摺すって出ると、我

知らず声を立てて、わツと泣きながら遁出にげだしたんです。

路地口の石壇を飛上り、雲の峰が立った空へ、棧橋のような、妻恋坂の土に突立った、この時ばかり、なぜか超然として——博徒なかまの小僧でない。——ひとり気が昂あがると一所に、足をなくように、腰をつけて倒れました。」

天地震動、瓦落かわらち、石崩れ、壁落つる、血煙うちの裡に、一樹が我に返った時は、もう屋根の中へ屋根がめり込んだ、目の下に、その物干ひしやが挫げた三徳のごとくになって——あの辺も火は疾はやかった——燃え上っていたそうである。

これ——十二年九月一日の大地震であつた。

「それがし、九識くしきの窓の前、妙乗の床のほとりに、瑜伽ゆがの法水を湛たたえ——」

時に、舞台においては、シテナにがし。——山の草、朽樹くちきなどにこそ、あるべき茸すまが、人の住すまう屋敷に、所嫌はえいわず生出はえいづるを忌み悩み、ここに、法力の験げんなる山伏きとうに、祈きとう禱を頼もうと、橋うちがかりに向つて呼掛けた。これに応じて、山伏が、まず揚幕うちの裡うちにて謡つたのである。が、鷲玄庵と聞いただけでも、思いも寄らない、若く艶つやのある、しかも取沈めた声であつた。

幕——揚る。——

「——三密の月を澄ます所に、案内申さんとは、誰そ。」

すらすらと歩を移し、露を払った篠懸や、兜巾の装は、弁慶

よりも、判官ほうがんに、むしろ新中納言が山伏にいでた出立った凄味すこみがあつ

て、且つ色白に美しい。一二の松も影を籠めて、袴はかまは霧に乗るよ

うに、三密の声は朗らかに且つ陰々として、月清く、風白し。化け

鳥ちようの調の冴さえがある。

「ああ、婦人だ。……鷺流さざりゆうですか。」

私がひそかに聞いたのに、

「さあ。」

一言いったきり、一樹じつが熟と凝視みつめて、見る見る顔の色がかわ

るとともに、二度ばかり続け様に、胸を撫なでて目をおさえた。

先を急ぐ。……狂言はただあら筋を言おう。舞台には茸の数が十三出る。が、実はこの怪異を祈いのり伏せようと、三山の法力を用い、秘密の印いんを結んで、いら高の数珠を揉もめば揉むほど、夥おびただ多しく一面に生えて、次第に数を増すのである。

茸は立たて衆しゆう、いずれも、見徳、嘯うそのふき吹、上うわひげ髭、思い思いの面を被かぶり、括くくり袴ばかま、脚きやはん絆、腰帶、水衣みずぎぬに包まれ、揃揃つて、笠を被る。塗笠、檜ひのき笠がさ、竹子笠、菅すげの笠。松茸、椎茸、とび茸、おぼろ編笠、名の知れぬ、菌きのこども。笠の形を、見物は、心のままに擬なぞらえ候え。

「——あれあれ、」

女山伏の、優しい声して、

「思いなしか、茸の軸に、目、鼻、手、足のようなものが見ゆる
」

と云う。詞ことばにつれて、如法の茸どもの、目を剥むき、舌を吐いて
嘲あざけるのが、憎く毒々しいまで、山伏は凜りんとした中うちにもかよわく
見えた。

いくち、しめじ、合羽かっぱ、坊主、熊茸、猪茸ししたけ、虚無僧茸こむそうたけ、のん
べろ茸、生える、殖ふえる。蒸上り、抽ぬき出いでる。……地蔵が化けて
月のむら雨に托鉢たくはつをめさるるごとく、影朧おぼろに、のほのほと並
だ時は、陰気が、緋ひの毛氈もうせんの座を圧して、金銀のひらめく扇子おうぎ
の、秋草の、露も砂子も暗かった。

女性の山伏は、いやが上に美しい。

ああ、窓に稲妻がさす。胸がとどろく。

たちまち、この時、鬼頭巾に武悪の面して、極めて毒悪にして、邪相なる大茸が、傘を半開きに翳し、みしと面をかくして顕われた。しばらくして、この傘を大開きを開く、鼻を嘯き、息吹きを放ち、毒を嘯いて、「取て嚙もう、取て嚙もう。」と躍りかかる。取着き引着き、十三の茸は、アドを、なやまし、黝り黝り、山伏もともに追込むのが定であるのに。――

「あれへ、毒々しい半びらきの菌が出た、あれが開いたらばさぞ黝多おびただしい事であろう。」

山伏の言につれ、件の毒茸が、二の松を押す時である。

幕の裾から、ひよろりと出たものがある。切禿きりかむろで、白い袖

を着た、色白の、丸顔の、あれは、いくつぐらいだろう、はこの
 だから二つ三つと思う弱々しい女の子で、かさかさきと衣ものの膝
 ずれがする。菌きのこの領した山家やまがである。舞台は、山伏の気が籠こもつて、
 寂しんとしてゐる。ト、今まで、誰一人ほとんどあしおと磴音を立てなかつ
 た処へ、屋根は熱し、天井は蒸して、吹込む風もないのに、かさ
 かさと聞こえるので、九十九折つづらおりの山路へ、一人、篠しの、熊笹を分け
 て、嬰子あかごの這出はいだしたほど、思いも掛けねば無気味である。

ああ、山伏を見て、口で、ニヤリと笑う。

ぞっ 悚然とした。

「鷺流？」

這う子は早い。

谿たにがわ河の水に枕なぞ流るるように、ちよろちよ

ろと出て、山伏の裙もすそに絡まつわると、あたかも毒茸が傘の轆轤ろくろを弾はじいて、驚破す、取て嚙かもう、とあるべき処を、——

「焼き食おう！」

と、山伏の、いうと齊ひとしく、手のしないで、数珠を振ふるつて、ぴしりと打つて、不意に魂消たまげて、傘なりに、毒茸は膝をついた。

返す手で、

「焼きくおう。焼きくおう。」

鼻筋鋭く、頬は白澄しろずむ、黒髪は兜巾とぎんに乱れて、生競はえぎそつた茸の、のほのほと並んだのに、打振うちふるうその数珠は、空に赤棟蛇やまかがしの飛ぶがごとく閃ひらめいた。が、いきなり居すくまつた茸の一つを、山伏は諸手もつてに掛けて、すどんと、笠を下さかさに、逆に立てた。二つ、三つ、

四つ。――

多くは子方だったらしい。恐れて、魅みせられたのであろう。

長なが上が下みは、脇座にとぼんとして、ただ首の横よこざまに傾かきまざるのみである。

「一樹さん。」

真ま蒼つさおになつて、身からだ体のぶるぶると震う一樹の袖を取つた、私の手を、その帷かたびら子が、落葉、いや、茸たけのこのような触感で衝ついた。

あの世話方の顔と重かさなつて、五六人、揚幕から。切戸口にも、楽屋の頭かしらが覗のぞいたが、ただ目鼻のある茸たけのこになつて、いかんともなし得ない。その二三秒時よ。稲妻の瞬まく間よ。

見物席の少年が二三人、足袋を空すかきに、逆さかになると、膝すそまでの裙

ひるがえあおむけを翻して仰向にされた少女がある。マツシユルールの類であろう。大人は、立構えをし、遁身にげみになつて、声を詰めた。

私も立とうとした。あの舞台の下は火になりはしないか。地震、と欄干につかまつて、目を返す、森を隔てて、煉瓦れんがの建たてもの、教会らしい尖塔せんとうの雲端に、稲妻が蛇のように縦にはしる。

静寂、深山に似たる時、這う子が火のつくように、山伏の裙すそを取つて泣出した。

トウン——と、足拍子を踏むと、膝を敷き、落した肩を左から片かた膚はだ脱いだ、淡紅の薄い肌はだ襦じゆ袢ばんに膚が透く。眉をひらき、瞳を澄まして、向直つて、

「幹次郎さん。」

「覚悟があります。」

つれに対すると、客に会釈と、一度に、左右へ言を切つて、一樹、幹次郎は、すつと出て、一尺ばかり舞台の端に、女の褌つまに片膝を乗掛けた。そうして、一度押おしいただ戴だくがごとくにして、ハタと両手をついた。

「かなしいな。……あれから、今もひもじいわ。」

寂しく微笑ほほえむと、搔かいはだけで、雪なす胸に、ほとんど玲瓏れいろうたる乳が玉を欺あざむく。

「御覧なさい——不義の子の罰で、五つになっても足腰が立ちません。」

「うむ、起たて。……お起ち、私が起たせる。」

と、かつきと、腕にその泣く子を取つて、一樹が腰を引立てたのを、添抱そえたきに胸へ抱いた。

「この豆腐娘。」

と嘲あざけりながら、さもいとしさに堪えざるごとく言う下に、

「若いお父さんに骨をお貰い。母さんが血をあげる。」

俯向うつむいて、我と我が口にその乳首を含むと、ぎんと白妙しろたえの生

命のちを絞つた。ことごと、ひちやひちや、骨なし子の血を吸う音が、

舞台から響いた。が、子の口と、母の胸は、見る見る紅玉びんごの柘榴ざくろがこぼれた。

颯さつと色が薄く澄むと——横に倒れよう——とする、反らした指

に——茸は残らず這込んで消えた——塗笠を拾つたが、

「お客さん——これは人間ではありません。——紅茸べにたけです。」

といつて、顔をかくして、倒れた。顔はかくれて、両手は十ウの爪つまへに紅は、世に散るまんじの白い瘰癧けいれんを起した、お雪は乳首を嚙か切みきつたのである。

おとし
一 昨年おとしの事である。この子は、母の乳が、肉と血を与えた。いま一樹の手に、ふつくりと、且つ健かに育っている。

不思議に、一人だけ生命いのちを助かった女が、震災の、あの劫火ごうかに追われ追われ、縁あつて、玄庵げんあんというのに助けられた。その妾めかけであるか、娘分であるかはどうでもいい。老人だから、楽屋で急病

が起つて、踊の手續てだれが、見真似の舞台を勤めたというので、よく
おわかりになるうと思う。何、何、なぜ、それほどの容色きりようで、
酒場へ出なかつた。とおっしやるか？ それは困る、どうも弱つ
たな。一樹でも分るまい。なくなつた、みどり屋のお雪さんに：
：お聞き下さい。

昭和五（一九三〇）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号⁵⁻86）を、「秋葉ヶ原」は小振りに、「安達《あだち》ヶ原」「日《ひ》ヶ窪」は大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2001年9月17日公開

2005年9月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木の子説法

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>